

2013 年 12 月 07 日
第 27 回雲南懇話会
JICA 研究所国際会議場

日本人とチベット

—河口慧海のチベット旅行を中心として—

高野山大学教授 奥 山 直 司



*河口慧海肖像写真 1913 年 11 月 16 日ダージリンで撮影 堺市文化財課提供



* 新出河口慧海関係資料

堺市文化財課提供

1 はじめに

日本人がチベットと関わりを持ちはじめたのは、日本が近代化の道を歩みはじめてからのことである。明治 20 年代（1887 年～）から、日本仏教界には「入蔵熱」（チベット入国熱）が起こり、何人もの青年僧が鎖国体制下のチベットを目指した。その中で最初に禁断の都ラサに到達したのは黄檗僧河口慧海（1866－1945）であった。本講演では、慧海の足跡を日本からヒマラヤ・チベットへとたどりながら、日本・チベット関係の原点ともいべき彼の探検行に秘められた夢と志について考えてゆく。

そもそも河口慧海とは何者なのか。東京世田谷の九品仏浄真寺境内には、彼の顕彰碑「河口慧海師碑」（1957 年建立）がある。その碑文は次の言葉に始まっている。

「我国最初のヒマラヤ踏査者 日本西藏学の始祖 在家仏教の首唱者」（椎尾弁匡撰）

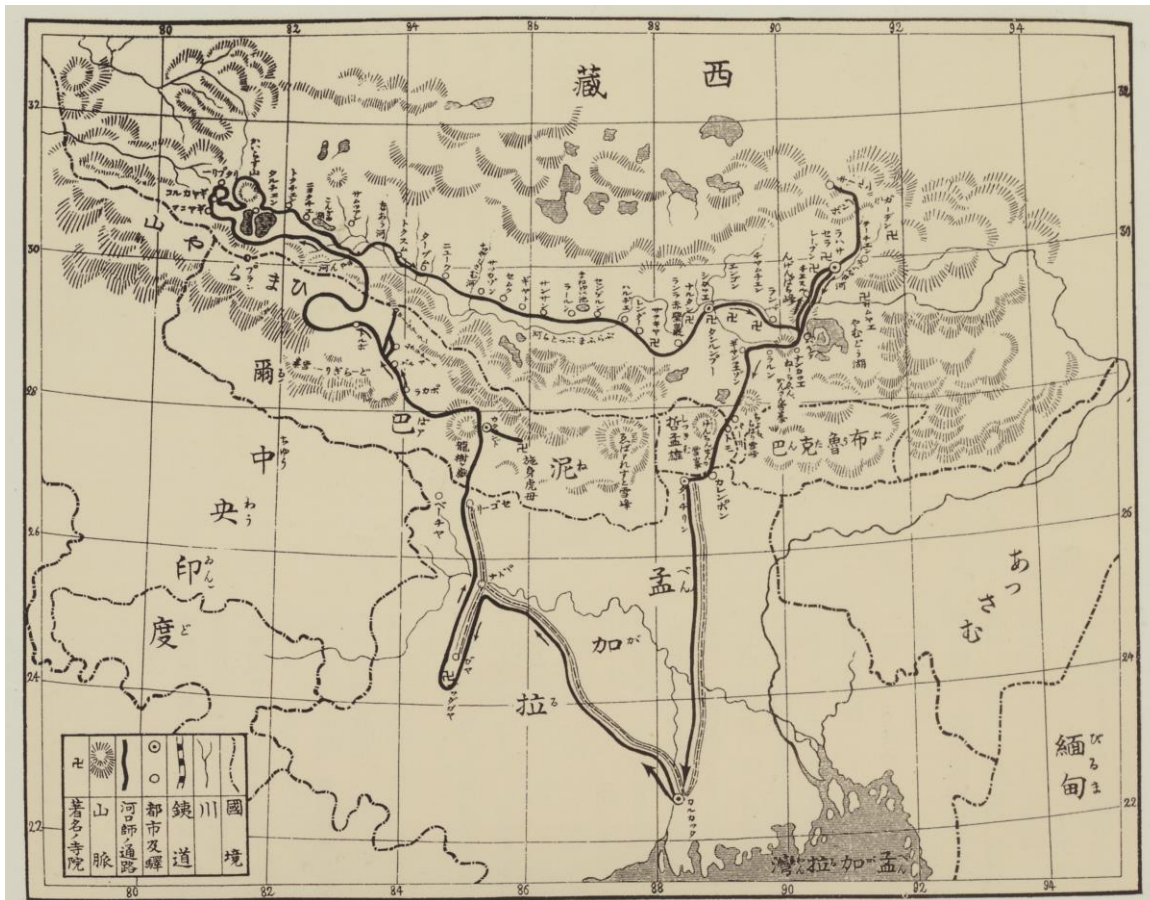
この一行は、慧海一代の業績の簡にして要を得た紹介になっている。ここに示された探検旅行者、学者、宗教家の三つの顔は、慧海という一個の人格において有機的に結びついていた。

慧海は、江戸時代の最末期に泉州堺の樽職人の長男に生まれた。15 歳で仏道に志を立て、25 歳の時、黄檗宗で出家。彼のチベット旅行、より正確に言えばインド、ネパール、チベット旅行は、前後 2 回、通算 17 年にも及んだ。だがこの大旅行も、彼自身にとっては、青年時代に立てた志を実現するためのさらに長い旅路の一里塚に過ぎなかった。その志とは、分かりやすく正確な和訳の大蔵経（仏典の集大成）を作って、日本国民の大安ん（心が安らぎ動揺しない境地）の基礎としよう。そのためには仏教の原点である釈迦牟尼の真実の教えを明らかにしなければならない、というものであった。

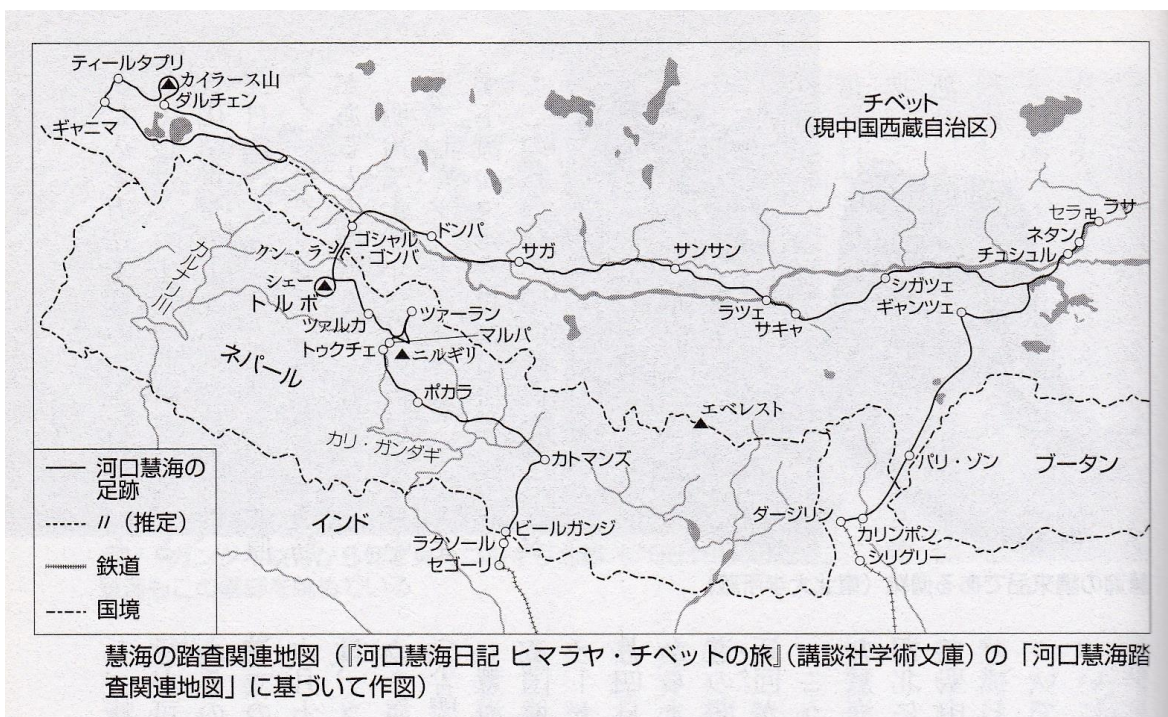
2 河川慧海 略年譜（年齢は数え年）

1866(慶応 2)	1 歳	和泉国堺(現・大阪府堺市北旅籠町西三丁)に樽職人「樽善」の長男として生れる。幼名は定治郎。
1872(明治 5)	7 歳	小学校入学。12 歳で退学して家業に従事。
1880(明治 13)	15 歳	土屋鳳州の晩晴書院で漢学を学ぶ。釈迦の伝記(『釈迦御一代記図会』?)を読んで発心。禁食肉・禁酒・不淫を誓う。黄檗宗の佐伯蓬山に師事し、在家のまま難波の瑞龍寺(鉄眼寺)、正徳寺で修行。
1888(明治 21)	23 歳	上京、本所の羅漢寺に寄宿して、哲学館(現・東洋大学)に入学。
1890(明治 23)	25 歳	羅漢寺で得度して慧海仁広(えかい・じんこう)となる。
1893(明治 26)	28 歳	宇治の黄檗山万福寺の塔頭で黄檗版一切蔵經を読むうちにチベット行を決意。
1897(明治 30)	32 歳	6 月 26 日、神戸を出港。第1回インド・ネパール・チベット旅行に出発。インドのダージリンでチベット学者サラット・チャンドラ・ダースの世話を受け、チベット語を学ぶ。
1899(明治 32)	34 歳	1月 26 日、ネパールに潜入。ボードナート滞在後、西北ネパールのカリ・ガンダキ峡谷に入り、5月、ムスタン地方のツァーラン村に到着。
1900(明治 33)	35 歳	トルボ地方を通り、7 月 4 日、チベット国境の峠(クン・ラ、海拔 5411m)に達する。西チベットのマーナサローワル湖、カイラース山を巡礼した後、チベットの禁断の都ラサに向かう。
1901(明治 34)	36 歳	3 月 21 日、ラサ到着。セラ寺に入学し、医者として名声を博す。
1902(明治 35)	37 歳	5 月、日本人であることが露見してラサを去り、チベットを脱出。7 月、ダージリンに戻る。
1903(明治 36)	38 歳	1-3月、投獄されたチベットの恩人たちを助けるためネパールに行き、総理大臣に直訴。5 月 20 日、神戸帰着。チベット旅行談を新聞連載、一躍時の人に。翌年、『西藏旅行記』出版。
1904(明治 37)	39 歳	10 月 11 日、神戸港から第 2 回インド・ネパール・チベット旅行に出発。以後、インド・ネパールで多年、梵語研究、資料収集。
1909(明治 42)	44 歳	インドで『西藏旅行記』の英語版 <i>Three Years in Tibet</i> を出版。
1914(大正 3)	49 歳	第 2 回チベット入国。1月 21 日、シガツェ着。8 月 7 日、ラサ着。
1915(大正 4)	50 歳	9 月 3 日、神戸帰着。翌年から研究生を募りチベット語を教授。
1920(大正 9)	55 歳	仏教宣揚会を発足させて布教活動に従事。傍ら大乘仏典の現代語訳を次々に刊行してゆく。
1926(大正 15)	61 歳	還暦を機に還俗を発表。8 月、『在家(ウパーサカ)仏教』出版。翌年在家仏教修行団発足。晩年は『蔵和辞典』の編集に没頭。
1945(昭和 20)	80 歳	2 月 24 日、東京世田谷の自宅で病没。

3 河口慧海第1回チベット旅行経路図



(『西蔵旅行記』初版本より)



慧海の踏査関連地図 (『河口慧海日記 ヒマラヤ・チベットの旅』(講談社学術文庫) の「河口慧海踏査関連地図」に基づいて作図)

参考文献

- 河口慧海著、高山龍三校訂『チベット旅行記』全5巻、講談社学術文庫、講談社、1978年
- 河口慧海著、奥山直司編『河口慧海日記—ヒマラヤ・チベットの旅—』講談社学術文庫、講談社、2007年
- 河口 正 『河口慧海 日本最初のチベット入国者』春秋社、新版、2000年
- 高山龍三編 『展望 河口慧海論』法蔵館、2002年
- 高山龍三 『河口慧海への旅—釈迦生誕地に巡礼した人びと』勉誠出版、2011年
- 『季刊民俗学 119 河口慧海の道』千里文化財団、2007年
- 奥山直司 『評伝 河口慧海』中公文庫、中央公論新社、2010年